瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば
年間第三十主日Ａ年（２０２６年１０月２５日）

主任司祭　小西　広志

第一朗読：出エジプト２２章２０－２６節
第二朗読：テサロニケの信徒への第一の手紙　１章５ｃ－１０節
福音朗読：マタイによる福音書２２章３４－４０節

三つの朗読から
第一朗読の「わたしは憐れみ深いからである」（２６節）の一節をこころにとめましょう。弱い者、貧しい者、抑圧された者に目を注ぐのが神の憐れみなのです。

第二朗読の「聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ」（６節）が印象深いです。みことばを受け入れるとは福音を受け入れることです。福音を受け入れるとはイエスさまご自身を受け入れ、イエスさまとのパーソナルな関わり合いのなかに入れていただくことです。

福音朗読にある短いことば「愛しなさい」（３７、３９節）は、キリスト教信仰の本質を突くことばとなります。しかし、これは「～しなければならない」の掟ではありません。なぜなら愛を命じ、愛に生きられるのは、憐れみ深い神から愛されているという前提があるからです。ですから、このことばは生きることへの招きのことばとなります。

ひとこと

「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である」（マタ２２章３７－３８節）はイエスさまの答えですが、すでに指摘したように『申命記』からの引用です。ユダヤ人は朝夕に二回、「シェマー」（聞け）ということばで始まるこの箇所と、同じく『申命記』１１章１３－２１節、そして『民数記』１５章３７－４１節を信仰告白として唱えることが義務づけられていたそうです。

存在のすべてをかけて神を愛するとは、いったい何を意味するのでしょうか？いくら朝な夕なにこのことばを唱えたところで、生きている現実として愛が実践されるわけではないでしょう。愛は掟のように命じられるものでも、誰かから強制されるものでもないのです。その人のこころの内側からあふれ出てくるのが愛です。このような自発的な愛と愛の行いは、愛された

という経験から生まれます。愛されたという、その愛に応えるものとして人は誰かを愛していくのです。ですから、愛だけが愛を呼び起こすことができるのです。神から愛されたという体験を思い起こし、その愛のなかに生かされているのだという事実から、神を愛するという動機づけが生じるのです。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」（３７節）とイエスさまはおっしゃいますから、この愛は何一つ残さず、ささげつくす愛であるはずです。わたしたちが神さまから愛されたのは、わたしたちが神さまからの愛を受けるにふさわしかったからではありません。無意味なもの、罪人を愛される神さまの無償の愛を受けたのです。ですから、その愛に応えるわたしたちの応答もまた、無条件でなければならないでしょう。

イエスさまは、天の御父から愛されていることをよく知っていました。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者」（マコ１章１１節　フランシスコ会訳）という天の御父のことばはイエスさまの心にいつも響いていたことでしょう。御父からの愛に精一杯応えようとした時に、イエスさまにとって十字架の道は当然のことだったのです。無償の愛に応える、無条件の愛の姿を十字架に見ないわけにはいきません。

イエスさまはこのように神への愛を説きながらも、さらに付け加えます。「第二も、これに似ている。『隣人をあなた自身のように愛しなさい』。」（マタ２２章３９節）。最初の掟と二番目の掟は切り離すことができません。なぜなら、神さまへの愛は隣人への愛の実践において具体的に示されますし、隣人への愛は神への愛に基礎をおくからです。隣人への愛を生まないような神への愛は、自己中心的な愛です。宗教的エゴイズムといってもよいでしょう。神を愛していると称して、真に神を愛しているのではなく、自分の宗教的な関心や宗教心を満足させているにすぎないのです。

隣人とは自分が選択するものではありません。その人にとって隣人となることがわたしたち一人ひとりに求められているのです。神を愛し、人を愛せる者となれますように。そのためには神から、隣人から無償で愛されてきたことを深く味わえますように。